第２回兵庫県立大学評価委員会　議事録

１　会議の日時及び場所

（１）日時　　平成２１年１１月２７日（金）　13:00～15:00

（２）場所　　兵庫県公館　第２会議室

２　出席した委員

石川委員長、藤田委員、西門委員、西川委員

３　出席した職員

（県立大学）　熊谷学長、鈴木副学長、阪本副学長、清原副学長、大原事務局長、
柳井事務局副局長兼総務部長、田中事務局企画調整部長、菅野事務局学務部長

（兵庫県）　榎本企画県民部教育・情報局長、西岡企画県民部教育・情報局大学課長

４　会議の内容

（１）開　会

（２）議　事

①評価の進め方について

事務局より資料１により説明

②自己評価委員会の最終評価（案）について

県立大学より資料２により説明

③教育分野における項目別評価について

事務局より資料３により説明し、意見交換を行った（下記５参照）。

（３）今後のスケジュール

事務局より資料４により説明

（４）閉　会

５　意見交換の概要

○　委員会の評価は、第２期中期計画として作られた計画に対してどれだけ達成しているかということであるが、それに加え、計画自体が完全であったとは限らないので、その後の経済状況の変化なども踏まえ、柔軟に全体を整理し直して総合的に判断する必要がある。

○　外部評価委員会の役割は、県立大学が６年目を迎えてどのような姿であるのか、３大学あった頃とどう変わったかを知らせる社会的責任と、もうひとつは、今後の大学の改善向上に資する助言ではないか。

○　評価のあり方に関しては、非常に多くの項目の評価をこれほど細かくする必要があるのかと思う。

○　数値目標が少なく、また適切な他大学と比較してのデータもない。内向きの形で評価が行われているので、大学に勢いがあって伸びているのか、人気が増しているのかなどが見えない。
→　現時点では、大学独自で他大学との比較評価をしていない。専門誌等が行っている大学評価を見ている状況である。
　大学としては、例えば社会的な貢献事業として、県民が関心を持たれている幅広いテーマで公開講座を実施するなどしており、全学で広報活動を充実させる努力をしていきたい。

○　自己評価が「４（計画のとおり推進中であると判断される）」の範囲が広いように思う。できているということなのか、これくらいでいいということなのか、大学側の目標がどのレベルにあるかが見えない。

○　教育はこれからの日本の一番キーになる部分で、小・中・高校教育と大学での教育を一緒に考えていかないと解決できない問題がたくさんある。そういう全体的なところを大学自身はどう考えるのかについてもポイントではないか。

○　入試広報については熱心な大学も多いので参考にされたい。
○　今年度の高校訪問件数は今後も増えるのか。
→　今年度は自己評価時点の件数を記載している。今後も高校訪問は実施していく。

○　ＡＯ入試あるいは推薦入試で入学した学生をフォローアップして、一般入試で入学した学生と比較することが、アドミッションポリシーの検証だと思う。

○　社会がどのような学生を求めているかを把握することは、全学的な取組として重要である。
○　評価にあたり、教員側の視点が多いのではないか。学生調査は、断片的ではなく継続実施してこそ読み取れる意味がある。例えば、第一志望で入学しなかった学生の卒業年次の満足度が上がっていれば、それは目に見えるかたちでの県立大学の教育の成果といえる。
○　ニーズを把握するシステムはできているので、その継続による経時比較が非常に大切である。授業評価アンケートは学部別、学年別でまとめるとか、企業アンケートは全学で実施するなど。

○　就職支援として、社会で活躍する卒業生との交流機会の提供が挙げられているが、卒業生だけでなく他の社会、あるいはインターンシップなどの取り入れ方に今後力を入れる必要がある。

○　卒業生や留学生のデータベースを整備すること自体がポイントなのではなく、それをどう使っていくかということがポイントだ。

○　留学生が少ないように思うが、特に理工系の留学生を積極的に受け入れないでいいのか。受入に対してどのような目標や考えを持っておられるのか。

→　受入のためには住宅支援と奨学金支援という２つの柱を整備することがまず重要と考えており、民間施設、民間奨学金の活用を図りながら努力している段階である。そのため現時点では、何年までに何人といった目標設定はしていない。

　アルバイトが見つけにくいなど、キャンパスの地理的条件も影響している。

○　リベラルアーツ教育の充実や学力の維持向上に対する取組など、評価指標のない項目が見受けられるが、どういう基準で判断し評価されたかを知るためには質的な指標も検討すべきではないか。

○　評価の指標が量的な基準に偏りがちである。質的評価は難しいが、人数や回数では評価できないものもある。調査のまとめ方なども学部によっては主観的になっている。

→　数値で表せない評価の仕方、見方について、引き続き勉強していきたい。

○　統合の意義にも関わるが、例えば、理工系の学生が経済経営系の科目を受講できる仕組みなどはあるのか。実際にどのような科目があり、実績はどうか。

○　旧３大学におられて現在も県立大学におられる先生方に、統合前後の違いを判断してもらうのが、一番分かりやすいのではないか。

→　統合前と統合後のメリットについてどのような視点で比較すればよいかを考えているが、難しいところである。

　大学内部の者から見ると、例えば看護大学が、統合することによって応用情報科学研究科という情報系の大学院と一体になり、看護情報関係の教育研究分野が現に行われている。また、他学部・他キャンパスの講義を聴講する道も開かれている。これらは統合のメリットであるが、メリットが見えないというご意見については、広報活動を充実させながらご理解をいただく努力が必要である。

　県下全域に広がる施設を生かして、兵庫県全体をキャンパスとした教育活動に取り組んでいるところであり、今後その成果を、統合のメリットとしてお示ししていきたい。

　学部の先生の意見として、学生の質については統合前後で変化はないが、統合されてからカリキュラムがより系統的に編成されているため、学生がよく勉強している、と聞いている。